フェイタル・バレット的な日常

鉄夜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は、

ソードアート・オンライン　フェイタル・バレット及びソードアート・オンライン　オルタナティブ　ガンゲイル・オンラインの二次創作短編集です

基本ネタを思いついたら書く感じなんで気軽によろしくお願いします。

オリ主、オリ設定など大量に含んでいます

ご注意ください。

目　次

少女の孤独を癒すのは・・・。 ― 1
女子会にて ― 30
かくして眠れる騎士は目覚める ― 47

少女の孤独を癒すのは・・・。

ＧＧＯ《ガンゲイルオンライン》
ＳＢＣグロッケン。
自身のスコードロンのホームの中でカチューシャはどこか浮かない顔をしていた。
「はぁ。」
本日何度目かのため息を吐いた彼女を、
彼女のサポートＡＩ、アファシスであるコハクと、
カチューシャの幼馴染であるクレハ、
そして、スコードロンのメンバーであるクラインが心配そうに見ていた。
「マスターは朝からずっとあの調子なのです。」
「一件いつも通りだけど・・・。」
「たしかに少し元気がねぇなぁ。
・・・リアルで何かあったんじゃねぇか？」
クラインの言葉に、クレハは「まかせて。」
と言うとカチューシャに歩み寄っていく。

「カチューシャ。」
「なに？クレハ。」
「リアルで何かあった？」
　遠くから聞こえてきたどストレートな言葉に、クラインとコハクはズッコケそうになった。
「どうしたの？急に・・・。」
「なんか元気なさそうだから聞いただけよ。
　で、そんな顔するってことは何かあったのね？　」
「まぁ、何かあっと言えばあったけど大したことじゃないし」
「じゃあなんで今日そんなに元気ないの？」
「昨日目当ての武器が出るまで粘ってたから。」
「誘った私が言うのもなんだけど本当にどハマりしたわねあんた。
　で、それはそれとしてリアルで何があったの？」
「リアルのことを聞くのはマナー違反だよクレハ。」
「はぁ？
　そんなこと言えばなんとかなると思ってるの？
　アンタが私に隠し事なんて百年早いのよ！」

「うーん、でもなぁ・・・。」
戸惑うカチューシャに、クレハはトドメとばかりに詰め寄る。
「ほら、観念してゲロっちゃいなさい!」
「あ・・・あう・・・」
「あらあらだめよ、クレハちゃん。」
クレハの背後から、ツェリスカがツカツカと歩み寄って言う。
「話したがらない相手から無理やりリアルの話を聞き出そうなんて。
可哀想じゃない。」
ツェリスカはカチューシャの前に立つ。
「ねぇ、カチューシャちゃん。
何があったのか分からないけど。
私たちでよければ相談に乗るわよ?」
「ツェリスカの言う通りだ、カチューシャ。」
カチューシャの周りに、
キリトやアスナ達スコードロンのメンバーが近寄っていく。
「こういう時に助け合うのが仲間ってものだろ。」
「話すだけでも楽になるよ?」

「私もいますよー・マスターー!」
　カチューシャは全員の顔を見渡すと、
「本当に大したことないんだけどなぁ。」
　ポツリポツリと語り出した。
「この間みんながログインしてない時に、
　知らない人達からパーティに誘われて、
　私も一人で暇だったから参加したんだ。
　すごく盛り上がって、楽しくってさ、
　フィールドから出た後オフ会に誘われて、
　ついつい乗っちゃったんだよね。」
「なに?そのオフ会でトラブったの?」
　クレハの指摘にカチューシャは首を振った。
「オフ会はとっても楽しかったんだ、
　でも解散するってなった時、そのパーティメンバーの1人が声をかけてきて、しつこく電話番号とかを聞いてきたんだよ。」
「もしかして、それで教えちゃったの?」
「ううん、しつこかったけどなんとか追い払ったんだ・・・けど・・・。」

「けど？」
カチューシャは真顔で言う。
「家までつけられちゃったみたいなんだよね。」
周りの空気が凍った。
「それから三日間ぐらいかなぁ。
夜に窓から外見ると家の前の電柱からこっち見てるんだよね。
一体何が楽しいんだろうね・・・ってどうしたのみんな。」
キョトンとしたカチューシャに、クレハが怒鳴る。
「どうしたのじゃないわよ！
なにが大したことないよ！
思いっきりストーカーされてるじゃない！」
「あーうん、そーだね。」
表情に一片の曇もないカチューシャに、キリトが問いかける。
「やけに冷静だな。
怖くないのか。」
「まぁ、一人暮らしだとこういうの偶にあるし。」
「はぁ!?あんた今一人暮らしなの!?

おじさんとおばさんは!?」
焦った様子で聞くクレハに、カチューシャは淡々と答える。
「えっと、会社が海外に事業を展開することになって。
中一の頃に二人とも転勤しちゃって。」
「中一!?そんな前から1人なわけ!?
なんでそういうこと早く言わないの!?」
激昂するクレハにキリトが尋ねる。
「落ち着いてくれクレハ。
話が全く見えない。」
「あぁ、ごめん。
この子の両親同じ会社のプログラマーなのよ。」
「それで一人暮らしって・・・両親は反対はしなかったのか?」
「反対というか・・・私から言い出したことじゃなくて『あなたなら大丈夫だよね』って、
両親が・・・。」
「へぇ、信頼されてるのね。」
そう言ったクレハに、カチューシャは微笑んで答える。
「はは、ホントにね。」

その笑顔が、クレハにはどこか悲しげに見えた。
「あんた・・・。」
「でもよー。」
クレハの言葉を遮るようにクラインが言う。
「それならなおのこと何とかした方がいいんじゃねぇか?」
「大丈夫、こういう時の対処法は心得てる。」
「対処法?」
首を傾げるアスナに、カチューシャは頷く。
「もちろん、拳で抵抗。」
『ダメに決まってるでしょ!』
女性陣が、カチューシャに総ツッコミをする。
「大丈夫、護身術には自信がある。」
そう言ったカチューシャの肩を、ツェリスカが掴むと言い聞かせるように言う。
「そういう問題じゃないの!
カチューシャちゃんは女の子なんだから、
危ないことをしちゃダメよ!分かった!?」
「分かったけど・・・こわいよ?ツェリスカ。」

ツェリスカがそばから離れると、カチューシャは全員にいう。
「心配してくれるのはありがたいけど、
この件は警察に言ってあるから大丈夫だよ。」
「それでも捕まるまで危ないわよ。」
「アスナの言う通りだな
だな。
誰かが様子を見に行った方がいいんじゃないか？」
「あんたが住んでるのって○○の当たりよね。」
「うん。」
「この中でそこに一番近いのは・・・」
全員の視線が、一人に集中する。
「・・・え？」
視線の先にいたクラインは、ついつい間抜けな声を出した。
＃＃＃＃＃
翌日の夕方、壷井遼太郎（クライン）は高校の校門前に居た。
（まさかリアルのカチューシャに会うことになるとわな・・・。
でもまぁ、こういう時に女を守るのが男の役目ってもんだよな。

・・・それに）

クラインは顔をニヤつかせる。

（ここでいいとこ見せれば、ツェリスカとデートできるかもしれねぇしなぁ。

ぐふふ。）

と、そんな邪念に満ちた事を考えていると

「もしもし警察ですか、校門に何やらニヤついている不審者がいます。」

「ま・・・待ってくれ！俺は怪しいものじゃ・・・ってこの声は・・・。」

クラインが顔を上げると、制服姿の少女が居た。

、

少女はクラインを見てクスクスと笑っていた。

「リアルでもあっちでもあんまりキャラ変わらないんだね。」

「やっぱりカチューシャか、脅かすなよ・・・。」

「ごめんごめん、でも高校の前でニヤニヤするのはやめた方がいいよ？

私じゃ無かったらマジで警察呼ばれるかもだし。」

「そ・・・それもそうだな。」

クラインは恥ずかしそうに後頭部を書きながらも、カチューシャの姿を確認する。

美しい黒髪のショートヘアに、中性的な顔立ちは美少女と呼んで差し支えないもの

だった。
（なるほどな、直結厨がほっとかない訳だ。）
クラインが考えていると、カチューシャは彼に二歩近づいて微笑む。
「御城飾（みしろかざり）です。
よろしくね、えっと・・・」
「壷井遼太郎だ、呼ぶ時はクラインでいいぞ。
そっちの方が呼び慣れてるだろ。」
「うん、じゃあ私もカチューシャで。」
二人が自己紹介を終えると、
「マスター！私もクラインとお話したいのです！」
「あ、そうだね。」
「え？今の声・・・どこから？」
キョロキョロとしているクラインに、カチューシャは自分のスマホを見せる。
すると、画面の端からコハクが姿を見せた。
「うお!?」
「こんにちはなのです！クライン！」
「なんだこりゃ！どういう仕掛けだよカチューシャ！」

「ユイやプレミアみたいに、コハクもいろんなところに連れていけたらなぁと思って。
ＧＧＯのシステムから切り離して、プログラミングしてみたんだ。」
「そうなのです！これで私とマスターはいつでもどこでも一緒にいれるのです！
あ、もちろん今まで通りＧＧＯでのアファシスとしても働けるのです！」
「おいおい、そんなことしてもいいのか？　」
「大丈夫、元々がアイテム扱いだったから簡単に切り離せたし、ツェリスカには許可を取ってあるから。
ていうかむしろデイジーも同じことを出来るようにして欲しいって頼まれてる」
「あはは、アイツもアイツで親バカだからな。」
「それにしても・・・。」
コハクはクラインの顔を見て言う。
「リアルのクラインはゲームの中より老けて見えるのです。」
「な・・・なんだとアホシス！」
「あははは。」
「笑ってないで否定してくれよカチューシャ！」
和やかな空気がその場を包みこんだ。
＃＃＃＃＃

（ここがカチューシャの家・・・か。）
　クラインがカチューシャに連れられて辿り着いたのは、二階建てのそこそこ大きな家であった。
（この家に1人で・・・。）
　クラインが家を眺めていると、カチューシャが礼を言ってくる。
「わざわざ送ってくれてありがとう、クライン。」
「いいってことよ、レディを守るのは男の役目だからな。
　それじゃあ、俺はそろそろ帰るとするわ。」
「あ、ちょっとまって。
　折角だから晩御飯食べていかない？」
「・・・いけねぇなぁカチューシャ。
　男をホイホイ家にあげるもんじゃねぇぞ？」
「たしかにほかの男の人はそうかもだけど・・・」
　カチューシャはニッコリと微笑んでいう。
「クラインの事は信頼してるから。」
　カチューシャがそう言うと、クラインは恥ずかしそうに後頭部を掻く。
「そんじゃあ・・・馳走になるとするか。」

「やったぁ！」
嬉しそうにするカチューシャのあとを付いて、
家の中に入っていく。
「お邪魔しまーす。」
「フフ、いらっしゃい。」
クラインはリビングに通され、テーベルの前の座布団に座る。
カチューシャはリビングにあるパソコンを起動する。
起動して少しすると、モニターにコハクが現れた。
「ただいま！なのです！」
「ネット繋がってりゃどこにでも行けんだな。　」
「今のところ近くのネットワークだけなのです。
つまりはクラインのスマホにも入っていたずらし放題なのです。」
「おいやめろ。」
カチューシャは二人の会話にクスクスと笑うと、立ち上がる。
「それじゃあ、晩御飯作ってくるね。」
「お？何作ってくれるんだ？」
「うーん、そうだなぁ。

折角だから私の得意料理食べてもらおうかな。」
「得意料理？なんだそりゃ。」
カチューシャは人差し指を口に当て、
ウインクをして言う。
「ナイショ♪」
そう言ってキッチンに向かっていった。
「やっべぇ・・・今キュンときた。」
カチューシャが去ったあと、
胸を抑えながらクラインは言った。
「クライン・・・マスターに粗相をしたらクレハに報告しますからね。」
「分かってるけどよ・・・あの人懐っこさは卑怯だろ。」
「まぁ、気持ちはわかるのです。
学校でもあの調子で男女ともにモテモテなのです。」
モニターの中のコハクは自慢げに話す。
「それにマスターは面倒見がいいですから後輩にも慕われているのです。
先生からの信頼も厚いですし、
成績優秀、文武両道、容姿端麗！

三拍子揃ったまさに完璧な方なのです！」
「へぇ、そりゃすげえなぁ。」
「はい！すごいのです！」
と、ここ待て自慢げに話していたコハクだが、その表情が急に暗くなった。
「でも・・・家にいる時のマスターは時々すごくさみしそうな顔をするのです。
ＧＧＯでは・・・あんなに楽しそうなのに。」
「・・・だろうな。」
クラインはもう一度家の中を見渡す。
この家は、一人で住むには広すぎた。
「そんな時、いつも思うのです。
なんで私は・・・人間に生まれなかったんだろうって・・・もし人間だったらマスターに寂しい思いをさせずに済むのにって・・・。」
コハクの声が微かに震える。
「私は・・・無力です。」
「・・・レイ。」
落ち込むコハクに、クラインは優しく声をかける。
「そう落ち込むな、お前さんは無力なんかじゃねぇさ。」

「でも・・・」
「たしかにお前はあいつに触れられないかもしれない。
それでも、そばにいて話し相手になるだけでもあいつは救われてると思うぜ。」
「クライン・・・。」
クラインはコハクに笑顔でいう。
「だからお前はいつも通り笑ってろ。
じゃねぇと、大事なご主人様が心配するぞ。」
「・・・なんだかクラインが大人に見えるのです。」
「なんだとアホシス！」
「アホシスじゃないのです！」
こうして、いつもの口喧嘩が始まったのであった。
＃＃＃＃＃
「クライン、おまたせ。」
しばらくすると、カチューシャが数枚の皿を乗せたお盆を持ってリビングに戻ってくる。
カチューシャは、箸、白米、おかずの順番で机の上に並べていく。
「カチューシャ・・・こ・・・これってまさか。」

カチューシャはにっこり笑う。
「肉じゃが。
私が母さんに一番最初に教わった料理なんだ・・・って何泣いてるのクライン。」
カチューシャは片手で顔を覆っているクラインに尋ねる。
「まさか・・・まさかリアルでお袋以外の女子手作りの肉じゃがが食える日が来るなんて・・・思わなかったから。」
「少しはリアルに希望を持とうよクライン。」
カチューシャは苦笑いをしながらもクラインの正面に座り、手を合わせる。
それを見てクラインも、同じく手を合わせる。
「いただきます。」
「い・・・いただきます。」
クラインは肉じゃがを一口食べて、天を仰いだ。
「う・・・うまい・・・」
「大袈裟じゃない？」
「ホントだって、今すぐにだって嫁に行けるぜこりゃあ。」
「あはは、ありがとう。」
カチューシャも一口肉じゃがを口に運ぶ。

「うん、なかなかいい出来。」
　そういうとかすかに微笑んだ。
　クラインは肉じゃがを夢中になって頬張る。
　そしてふと正面を見ると、カチューシャが頬杖をついて微笑みながら自分を見ていることに気づいた。
「な・・・なんだよ。」
「あ、ごめんごめん。
　なんというかその・・・嬉しくてさ。」
「うれしい？」
「うん、誰かと食卓を囲むのなんて・・・本当に久しぶりだから。」
「だからってそんなに見つめるなよ、
　惚れちまったらどうすんだよ。」
「クラインのそういうところ私嫌いじゃないよ。」
　その様子を見ていたコハクが声を上げる。
「マスター！私も肉じゃが食べたいのです！」
「うーん、じゃあアスナに相談して再現してみよっかなぁ。」
「わーい！」

和やかな会話をしながら食事を楽しみ、
しばらくしてクラインは肉じゃがを完食した。
「いやー、くったくったぁ。」
「ふふ、お粗末様。」
しばらくぼーっとしていたが、クラインは気になったことを聞いてみることにした。
「カチューシャ、お前、寂しくねぇか？」
「どうしたの？急に。」
「いやその・・・何となく。」
「うーん、そうだなぁ。
たしかに寂しいけど・・・最初の頃よりマシかな。」
カチューシャはそう言って微笑むと、
ポツポツと語り出した。
「私、昔は本当にダメでさ。
泣き虫でひ弱で、クレハの後ろをずっとついて歩いてた。
自慢できることといえばゲームの腕くらいだったんだ。
でも、クレハが引っ越しちゃって『このままじゃダメだ。』って思ったんだ。
だから一生懸命頑張って、一人でなんでもできるようになろうって思ったんだ。」

「それで有言実行出来てるマスターはすごいのです！」
「ありがとう、コハク。
　でもね、いいことばかりってわけじゃないんだよ。」
「え？そうなのですか。」
「たしかに昔に比べて私は強くなった。
　大抵の事は一人で出来るようになったし、
　人に頼られるようにもなった。
　でも・・・いつの間にか人に甘える・・・頼ることを忘れてた。」
　カチューシャは自嘲するように笑う。
「そして私は・・・父さんと母さんに『行かないで』って言えなかった。
　いつも通り、『大丈夫』って言っちゃったんだ。」
「・・・カチューシャ。」
「それからはずっと後悔してた。
　一人で泣いた時もあった。
　すごく・・・寂しかった。
　慣れるまで結構時間かかったんだ。」
　心配そうに見つめるクラインに、カチューシャは微笑んで言う。

「でもＧＧＯを始めて、みんなと出会えて全部変わった。
　前より寂しくなくなったし、人に頼ったり頼られたりするってことがどういうことか思い出した気がする。」
　カチューシャはそこまで言うと、少し恥ずかしそうにはにかんで、
「だからその・・・ありがとね、コハク、クライン。
　私に出会ってくれてありがとう。」
　そう言った。
「私も・・・私もマスターに会えてよがったのですぅぅぅ！」
「あはは、泣きすぎだよコハク。」
「カチューシャ、今の言葉みんなに言った方がいいんじゃねぇか。」
「む・・・無理、恥ずか死ぬ。
　絶対内緒だからね。」
「無理って言ったら？」
「クラインを女子高生の自宅に上がり込んだ直結厨として運営（ツェリスカ）に通報する。」
「やめろ！垢ＢＡＮされる！
　つうか自分で上げといてそりゃねぇだろ！」
「あははは。」

楽しそうに笑うカチューシャをみて、クラインは言う。
「まぁ、何かあったらいつでも頼れ。
出来る限り助けてやるからよ。」
「うん、ありがとう。
・・・じゃあ早速だけど。」
カチューシャは格闘ゲームのソフトを取り出すと、
「頼っていいかな?」
クラインに向けてニィっと笑った。
＃＃＃＃＃
数分後、
カチューシャはクラインを見送るために家の外に出ていた。
「今日はありがとう、クライン。
すごく楽しかった。」
「おうよ、今度は負けねぇからな。」
「いいよ、またいつでもおいで。
ボコボコにしてあげるから。」
「なにをぉ!?」

「あははは。」
クラインはカチューシャの頭にポンと手を置く。
「クライン？」
「さっきも言ったが、何かあったら呼べよ？
子供は大人に迷惑をかけるもんだ。」
「うん、ありがとう、クライン。」
「おう、じゃあな。
アホシスもまたな。」
「はい！さようならなのです・・・ってアホじゃないのです！」
クラインは手を振って帰っていく。
カチューシャはクラインの姿が見えなくなるまで見送ると、大きく背伸びをする。
「さて、コハク。
片付けてお風呂入ろっか。」
「はい、マスター！」
そうやって家に戻ろうとした時。
ガシッ！
後ろから腕を思いっきり掴まれた。

カチューシャが振り返ると、そこには一人の男がいた。
「よぉ・・・やっと会えたなカチューシャ。」
件のストーカーであった。
それを確認すると、カチューシャはスマホの中のコハクに小声で話す。
「コハク、クラインのスマホにアクセス出来る?」
「は・・・はい、大丈夫なのです。」
「じゃあ悪いけど呼んできてくれる?」
「で・・・でもマスター!」
「私は大丈夫だから・・・おねがい。」
「り・・・了解なのです!」
コハクは急いでクラインのスマホに飛んで行った。
#####
コハクから話を聞いたクラインは、カチューシャの元へ走っていた。
「クライン!急ぐのです!」
「分かってるっての!」
スマホの中のコハクに急かされ、さらに速度をあげる。
「カチューシャ・・・無事でいてくれ。」

そして目的地に到着した。
「カチューシャ！」
「畜生！離せこの女（あま）！」
クラインが見たのは、男の腕を背中に回し、地面に押さえつけているカチューシャの姿であった。
「はいはい、大人しくして。
下手に暴れると腕いためるよ？
・・・それとも。」
カチューシャら男の耳元に口を寄せ。
「このままへし折ってやろうか？」
その言葉と共に男の顔は青ざめ、大人しくなった。
「ふう。
あ、クライン。
ナイスタイミング、警察呼ぶからこれ抑えるの代ってくれない？」
「お・・・おう。」
クラインが代わりに男を取り押さえている間に、カチューシャが警察に通報をして、男は連行された。

遠ざかっていくパトカーを見送ってから、
カチューシャは背伸びをする。
「一件落着だね。」
「そうだな・・・いやちょっと待て。」
クラインはカチューシャの両肩を掴むと、
体を自分の方へ向ける。
「大丈夫か!?カチューシャ!
何もされてないか!?」
「うん、大丈夫だよ、ありがとうクライｎ」
例を言い終える前に、カチューシャはクラインに抱きしめられた。
「はぁー、よかったぁ。
コハクが来た時は肝が冷えたぜ・・・。」
「無事だって言ってるのに・・・大げさだよクライン。」
「バカ、何も出来なかったんだから心配くらいさせろ!」
そういったクラインの胸の中でカチューシャは、
（あぁ・・・なんだろう。
・・・すごく・・・暖かい）

そう心の中でつぶやき、静かに目を瞑った。

＃＃＃＃＃

ＳＢＣグロッケン。

スコードロンのホーム。

「というわけで無事解決しました、

お騒がせしました。」

カチューシャはスコードロンのメンバーに頭を下げた。

それを見て、キリトは苦笑いで返す。

「結局カチューシャの力技だけどな。」

「意外とヒョロくて簡単に制圧できた。」

「だからってあんまり危ないことしちゃダメよ?」

心配気味にアスナが言うと、クレハがカチューシャに詰め寄る。

「今度から簡単に知らないパーティのオフ会に参加しちゃダメよ?

ＶＲＭＭＯは性別を誤魔化せない分、直結厨が多いんだから。」

「うん、気をつける。」

カチューシャの回答に満足そうに頷くと、

クレハは視線を移す。

「で、護衛のために寄越したのに大したこと出来なかった誰かさん、なにか弁明は？」
その言葉にクラインは、うぐぐと気まずそうに言う。
「しゃあねぇだろ！
現場に着いたら全部終わってたんだからよ！
あーあー、俺はどうせ役立たずですよー。」
「そんなことないよ、クライン。」
カチューシャはクラインに歩み寄ると、
したから見上げるように微笑んで言う。
「呼んだら駆けつけて来てくれたところは、
すごくかっこいいと思う。」
「そ・・・そうか？」
「うん、またいつでもご飯食べに来てよ。
事前に連絡してくれれば作って待ってるから。」
「おう！カチューシャの手料理なら何倍でも食えるぜ！」
そういったクラインの両肩が、ものすごい力で握られる。
クラインが後ろを振り向くと、笑顔で殺気を放つクレハとツェリスカがいた。
「クライン？カチューシャの手料理がどうしたって？」

「お話聞かせてもらえるかしら？」
「ま・・・待ってくれ！
話せば・・・話せば分かる！」
２人に詰問されるクラインを見るカチューシャの頬は、微かに赤く染まっていた。

女子会にて

「モテたい・・・。」

カチューシャ、コハク、クレハ、リズベット、シリカの女子５人しかいないスコードロンのホームでお茶を飲んでくつろいでいると、

リズがポツリと呟いた。

その言葉に、コハクを除く３人は面倒事に巻き込まれまいと聞かなかった振りをする。

「モテたい・・・。」

((また言った・・・。))

カチューシャはクレハとシリカにアイコンタクトを送ると２人は無言で頷きを返した。

カチューシャは小さくため息を吐いてリズに聞く。

「どうしたの？リズ。」

「聞いてくれる？カチューシャ。」

「うん、これ見よがしに呪詛のように繰り返されるよりマシだからね。」

リズはカチューシャに顔を近づけると、真剣な顔で言う。
「私ね・・・モテたいの。」
「それはもう聞いた。」
３度同じことを繰り返したリズにクレハが訪ねる。
「モテたいって言うけどリズさん。
キリトさんのことはいいの？
好きなんでしょ？」
「そうですよ、諦めちゃったんですか？」
「じゃあ聞くけどね！クレハ、シリカ！」
リズは立ち上がって興奮気味に言う。
「普通に考えてアスナに勝てると思う!?
あんな女子力オバケに！」
「それはまぁ・・・」
「難しいでしょうけど・・・」
「でしょ!?だから私は決めたの！
これを機に新しい恋を見つける！
そしてアスナとキリトに負けないくらいラブラブなカップルになってやる！」

リズは握りこぶしを掲げてそう言った。
「そういうことならアトバイスは任せてくださいリズ！」
「なにレイちゃん、自信満々ね。」
「当然です！なんと言っても！」
コハクは胸を張って自慢げに言う。
「マスターは今月、学校で５回も告白されているのです！」
「〝；、；：〝；、（；。；ж；。；）ブッ!?」
お茶を飲んでいたカチューシャは勢いよく吹き出し、コハクに詰め寄りほっぺたを引っ張る。
「何を言い出したのかなぁ？この子は。」
「ら・・・らってリズがこまっへるみはいだったはら・・・。」
「だからってそんなこt」
コハクを叱りつけるカチューシャの肩をリズがガシッと掴む。
カチューシャが振り返ると、リズは笑顔で言った。
「カチューシャ・・・友達なら助けてくれるわよね？」
「ちょっ・・・ちょっと待って！
たまたまだよ、偶然が重なっただけで。」

「そんだけ告られといて何言ってんの。」
「わ・・・私も教えて欲しいです！
どうやったらそんなにモテるんですか！」
「シ・・・シリカまで!?
助けてクレハ！」
「そこらへん私も気になるわね。」
「クレハあああああ！」
リズは、どんどんカチューシャに詰め寄る。
「さぁ、観念しなさいカチューシャ！」
「ちょっと待って！
私の話なんて参考にならないってば！」
「なんで！」
「だって・・・5人中3人は女の子だったんだもん！」
カチューシャは顔を真っ赤にしながら叫んだ
「その・・・ごめん。」
「謝らないで！泣きたくなるから」
「元気だしてください！マスター！」

「全部君のせいでしょうがぁぁぁぁ！」
「あうー！ほっへはひっはらはいでくらはいー！」
　カチューシャはコハクを解放すると、１度咳払いをする。
「で、話を戻すけど。
　モテたいならまず今どきの男の子の好みを理解するべきだと思うよ。」
「たとえば？」
「うーん、そうだなぁ。」
　カチューシャは少し考えて。
「・・・〇〇デレとか？」
「は？何それ。」
「例えばほら、ツンデレとか今どきの男の子好きそうじゃない？」
「ふむ、たしかにそうですね。」
「マスター！私いいことを思いつきました！
　ここにいる皆さんで思い思いのツンデレを演じてみるのはどうでしょう。」
「いいわね！演じてみてわかることもあるかもだし。」
「じゃあリズからどうぞ。」
　カチューシャに言われて、リズは咳払いする。

「ほ・・・ほら、これあげる。
勘違いしないでよね、別にあんたのために整備したわけじゃないんだから。」
「何その鉄臭そうなツンデレ!?」
「できる女がモテるでしょ?」
「確かにそうかもしれませんけど、
リアルの女の子はお弁当を作る感覚で銃の整備したりしませんから!」
「そう言うならあんたがやってみなさいよシリカ。」
「え!?
えーっと・・・コホン。
お弁当作りすぎちゃったから分けてあげる!
・・・とかですか。」
「かわいいのです!」
「シリかわいい。」
「撫でたい。」
「撫でくりまわしたい。」
「まともな意見がひとつもない!?」
「うーん、シリカの場合はツンよりかわいいが勝っちゃうなぁ。」

「うぅ・・・。」
　と、ここでコハクが急に立ち上がる。
「わかりました！リズとシリカのを合わせればいいんですね！」
　コハクは自信満々に言う。
「ＳＰＢレイピア作りすぎたから分けたげる！
　か・・・勘違いしないでよね！別にあんたのために作ったわけじゃないんだから！」
「うん、銃器から離れたら完璧だった。」
「あれ？」
「さて、次はとうとう真打登場よ！
　クレハ、お願い。」
「誰が真打よ誰が！
　・・・そうね・・・。」
　クレハは少し考えてから口を開く。
「お弁当作りすぎちゃったから分けてあげる！
　はぁ!?何勘違いしてんの!?
　作りすぎたって言ってんでしょ!?
　黙って食べなさいよ！　」

「おぉー！」
「やっぱり本家本元は違うわね。」
「誰が本家よ！
　ていうかカチューシャはどうなのよ、ただ見てるだけなんて許さないわよ!?」
「私？・・・うーん。」
　カチューシャは少し間を開けて答える。
「ＧＧＯに名前を刻むのは、この私なんだから！キリッ」
「それはツンデレじゃなくて私のモノマネでしょ！
　バカにしてんのあんた！」
「いやぁ、あの時のクレハ子供みたいにすねて可愛かったなぁって。」
「か・・・可愛い言うな！／／／／」
「ごめんごめん。」
　掴みかかるクレハをカチューシャが宥める。
「うーん、でもやっぱりツンデレは私には難しいわねぇ。」
「性格的には１番近いんだけどなぁ。」
「となると次は『クーデレ』でしょうか。」
「でもさぁ、シリカさん。

なんとなく敷居高くない？
なんとなく賢い人のイメージがあるし。」
「あら、まさに知性の塊な私にぴったりじゃない。」
「マスター、なぜリズは目を開けたまま寝言を言っているのですか？」
「ちょっとカチューシャ！
アンタの相棒容赦ないんだけど!?」
「あはは。」
「笑って誤魔化した!?」
「まぁリズさんが知的かは置いといて、
要はクールに頭の良さそうなこと言えばクーデレってことでしょ？
またやってみればいいんじゃない？」
「それはいいかもしれないのです！」
「クレハ、コハク、盛り上がってるところ悪いけどその会話自体が頭悪そうに聞こえるよ？」
カチューシャのツッコミはどこ吹く風で、他の女子４人は盛り上がる。
「あ、それならいいアイテムがありますよ！」
そう言ってシリカはストレージからメガネを取り出した。

「これ！これをかけてポーズを決めながらやったらクールじゃないですか!?」
「いいわね！それ！」
「すっごい頭良さそう！」
「クールなのです！」
（おかしい、急に会話のＩＱが溶けてきてる。）
　最初はリズがメガネをかける。
　そしてメガネをクイッと上げる。
「三権分立（キリッ」
「おー！」
「リズさんかっこいいです！」
「次！次あたしやりたい！」
　クレハはメガネを受け取りかけてポーズを決める。
「実に面白い（低音ボイス）」
「その人知ってる！」
「ＩＱ高さそうなのです。」
「天才って感じがします！」
（なるほど、みんな楽しくなって変なテンションになってるなこれ。）

カチューシャが冷静に分析していると、
次はコハクがメガネをかける。
「四面楚歌。」
「四字熟語！」
「いいじゃない！」
「すごく知的な感じがします！」
続いてシリカ。
「３．１４１５９２６５３５８９・・・」
「円周率！」
「いいわねリケジョ！」
「かっこいいのです！」
そんな感じでさんざん騒いだ四人は静観していたカチューシャに視線を送る。
「・・・え？もしかして私も？」
「当たり前でしょ。」
「本家本元のクーデレ見せなさいよ。」
反論しても無駄だと察したカチューシャはメガネをかける。
「マスター！すごく似合うのです！」

「やっぱり本物がつけると違うわね。」
「自分が偽物って自覚はあるんだねリズ。」
「ほらカチューシャ、そこで一言。」
「・・・も」
「も？」
　カチューシャは恥ずかしそうに頬を染めながら言う。
「モロトフ＝リッベンドロップ協定／／／／。」
「おお・・・。」
「これが・・・クーデレ・・・。」
「照れてるところポイント高いわね」
「かわいいのです！マスター！」
　恥ずかしくなったのか、カチューシャは乱暴に外してシリカに返す。
「はい、おしまいおしまい！
　大体シリカはともかく君達にクーデレなんて無理だって。
　クールとは正反対の性格してるんだから。」
「むぅ・・・。」
「それもそうね・・・。」

「難しいのです。」
「じゃああと残ってるのは・・・」
少し間を開けて、クレハが言う。
「ヤンデレ？」
「やめよう。」
ここまで静観の構えだったカチューシャが、ガタッと立ち上がる。
「なに、急にどうしたのよカチューシャ。」
「いやその・・・身に覚えがありすぎるから。」
「あぁ、そう言えばこの間ヤンデレに殺されかけてたわね。」
「ああいうのはアニメとかだから許されると思う。
リアルのヤンデレは怖いだけ。」
「いやいや、もしかしたら好きな人もいるかもしれないでしょ」
「・・・じゃあ試してみる？」
「え？」
カチューシャはクレハの手首を掴むと床に押し倒す。
「ちょ・・・いきなりなにｓ」
ドン！

クレハが文句を言い終える前に、クレハの顔の横にドンと手をつく。
あまりの迫力に、クレハは黙ってしまう。
「ねぇクレハ、なんで引っ越したりしたの？」
「そ・・・それは仕方なくｔ」
「私、クレハがいなくちゃダメなんだよ？
なのに・・・なんでどこか行っちゃったの？」
「ご・・・ごめ・・・」
「謝らなくていいよ・・・もうどこにもいかないように、鍵かけてしまっておくだけだから。」
「・・・」
恐怖で黙ったクレハの上からカチューシャはどいて、手を引いて立ち上がらせる。
「どうだった。」
「・・・怖かった。」
「分かればよろしい・・・で。」
カチューシャは他の３人の方を振り向き、
ハイライトの消えた目で言う。
「他の３人も、これ以上この話題続けるなら一人づつ倒すけど・・・どうする？」

「ま・・・待ってカチューシャ！
　私達が悪かったわ！」
「やっぱり普通が1番ですよね！」
「なのです！」
　青ざめる3人にカチューシャはニッコリと微笑むと、
「分かってくれてよかったよ。」
　ほっとするリズに、カチューシャはずっと疑問に思っていた事を言う。
「そもそも、なんで新しい恋を見つける必要があるの？」
「それはその・・・いつまでも引きずってるなんてみっともないでしょ？」
「そう？私はそうは思わないけど。」
「あんたはそうかも知れないけど、他の人がどう思うか。」
「そう思う連中にはそう思わせとけばいいんだよ。」
　カチューシャはリズに歩み寄りながら言う。
「いいかい、リズ。
　人間はね簡単に吹っ切れるほど綺麗じゃないんだよ。
　本気で恋をしていたなら尚更ね。
　私も、この間初めて人を好きになったばかりだけどさ、

だからこそ思うんだ、人を好きになるって凄いことだって。
だから、気が済むまで好きでいていいんだよ。」
リズの肩にポンと手を置く。
「私はそういうの、すごくかっこいいと思うよ?。」
「・・・お」
リズはカチューシャの腰に手を回し、勢いよく抱きつく。
「お母さぁぁぁぁぁん!」
「誰がお母さんか!」
リズの反応に驚きながらも、
これでようやく不毛なガールズトークから開放されると思ったカチューシャはホッとする。
・・・が。
「ところで、カチューシャの好きな人って誰。」
「・・・え?」
カチューシャは自分で墓穴を掘ってしまったことに気づき、誤魔化そうとする。
「な・・・ナンノコトカナー」
そんなカチューシャの肩を、シリカとクレハは後ろからガシッと掴む。

「私もそのお話聞きたいですねぇ。」
「私も詳しく聞きたいわねぇ、カチューシャ。」
「私も気になるのです！マスター！」
「え・・・ちょ・・・ちょっとまっ・・・。」
まさか自分が話の
中心になるとはおもっていなかったカチューシャは、その後3時間ほど4人の尋問を受けた。

かくして眠れる騎士は目覚める

ＳＢＣグロッケン。
メールで呼び出されたカチューシャは、
スコードロンのホームへ足を運んでいた。
ホームにつくと、スコードロンのメンバーが全員集合していた。
カチューシャは、メールの差出人であるキリトに事情を聞く。
「どうしたのキリト、何かあった？」
「あぁ、実はユウキから話があるらしいんだ。」
「ユウキから？」
ユウキは何故か浮かない顔をしながら、
みんなの前へ出た。
「実はね・・・退院出来ることになったんだ。」
『えええええ!?』
その言葉に、ユウキの病気のことを聞いていた皆は驚きの声をあげた。
「なにそれ!?どういうこと!?」

「落ち着いて、クレハ。
今からユウキが説明してくれるから。」
カチューシャが取り乱すクレハを落ち着かせると、ユウキはポツポツと話し出した。
「実は最新の治療薬が開発されて、
それの臨床実験の被験者に選ばれたんだ。
それで状態が良くなってきてさ、このまま行けば完治するだろうって。」
「ユウキ！」
側にいたアスナが、思わずユウキに抱きついた。
「よかったね・・・ユウキ。
ユウキが諦めずに頑張ったからだよ。」
「うん、ありがとうアスナ。」
それを見ていたツェリスカも嬉しそうにする。
「おめでたい話じゃない、
ねぇ、カチューシャちゃん！
・・・カチューシャちゃん？」
ツェリスカがカチューシャを見ると、
カチューシャは笑顔を見せず、それどころか浮かない顔をしていた。

「ちょっとカチューシャ！
もうちょっと嬉しそうにしなさいよ！」
「ああ、ごめんクレハ。
嬉しいのは嬉しいんだけどさ。
・・・本人が嬉しそうじゃないのが気になってね。」
カチューシャの言葉に、みんなの視線がユウキに集中する。
ユウキは落ち込んだ声で話す。
「じつは・・・その事を知った両親の親族がボクの親権を主張してるらしいんだ。
・・・たぶん、どっちかに引き取られることになると思う。」
「そんな・・・今までろくにお見舞いにも来なかったくせに・・・。」
ユウキの言葉にアスナは怒りの表情を見せる。
「多分両親の遺産が目当てだと思う。
そしてそうなったら・・・みんなと遊ぶことも出来なくなるかもしれない。」
「そんな・・・なんで・・・。」
「簡単な話だよ、アスナ。」
カチューシャがユウキの代弁とばかりに話す。
「金目当てに引き取った子供にアミュスフィアなんて買い与えるなんて思えない。

・・・でしょ？ユウキ。」
「・・・」
カチューシャの指摘に、ユウキは無言で頷いた。
「なんとか出来ないかな・・・キリト君。」
「すまないアスナ、今回ばかりはいい案が思いつかない。」
皆、なにかいい案はないかとそれぞれ話し合うが、
「ありがとう、皆。
でも・・・もういいんだ。」
その言葉で皆が再びユウキに注目する。
「ボクは今までみんなにいっぱいお世話になった。
・・・これ以上迷惑をかけるわけには行かないよ。」
そうやって作り笑いをするユウキに、
「ユウキは本当にそれでいいの？」
カチューシャはいつになく冷たい声で言った。
「ユウキが本心から言ってるなら私たちも引き下がる。
ユウキ、君は本当にそれでいいの？」
その問にユウキは声を震わして応えようとするが、

「ボクは・・・ボク・・・は・・・」
答えられず瞳から涙を流し、メニュー画面を開いてログアウトボタンに手を伸ばした。
「ユウキ!」
アスナが呼び止めるが、ユウキはログアウトしてしまった。
「カチューシャちゃん!
何もあそこまで追い込まなくても!」
ツェリスカの注意を背に、カチューシャは早足で入口に向かい移動してしまう。
「マスター!」
「待って、レイちゃん。」
追いかけようとするコハクをクレハが呼び止める。
「私が行く、レイちゃんはここで待ってて。」
「でも・・・」
「おねがい、任せて。」
コハクが頷くと、クレハはカチューシャの後を追っていった。
＃＃＃＃＃
クレハがカチューシャのホームに着くと、

部屋の主は部屋の隅で壁に向かって体育座りをしていた。
「本当にアンタはそういうところ変わんないわね。」
そう言うとクレハは、カチューシャの背中に自分の背中を合わせるように同じく体育座りをする。
「・・・なに？」
「なに？じゃないでしょ。
アンタがこうやって落ち込んだ時話を聞くのは私の役目じゃない。」
「小さい頃の話でしょ？」
「そうだけど・・・今のあんた、子供の頃のまんまよ？」
「・・・そうだね・・・うん、そうかも。」
カチューシャはクレハに静かに話し出す。
「ねえ、紅葉（もみじ）。」
「・・・どうしたの？飾（かざり）。」
「私、最低だよ。
さっきのユウキを見てたら、ＧＧＯを始める前の自分を見てるみたいで、ちょっとイラッとしちゃったんだ。」
「・・・どういうこと？」

「本音を言えずに1人で抱えて後悔してる。
　そんな自分。
　ダメだよね、私とあの子は全然違うのに・・・気がついたらきつくあたってた。」
「確かに八つ当たりは良くないけど・・・アンタはあの子に後悔して欲しくないんでしょ。」
「・・・」
「本音を言えずに後悔する。
　それがどんなに辛いか知ってるから、
　同じ思いをユウキにして欲しくない・・・そうでしょ?」
「そう・・・なのかな。」
「そうよ、何年の付き合いだと思ってるの。
　あんたのこと1番知ってるのはアタシなんだから。」
「ふふふ、叶わないなぁクレハには。」
　クレハに励まされ、カチューシャは静かに立ち上がる。
　クレハも立ち上がり、真剣な顔で尋ねる。
「それで、これからどうするの?カチューシャ。」
「・・・策はある。

やっぱり大人の身勝手てあの子が後悔するのは違うと思う・・・それに・・・。」
「それに？」
カチューシャは決意を込めた瞳で言う。
「まだ答えを聞いてないしね。」
＃＃＃＃＃＃
ログアウトして目が覚めたカチューシャ・・・御城飾はすぐさま立ち上がり、スマホで電話をかける。
「もしもし・・・父さん？
うん、大丈夫、私は元気だよ。」
カチューシャは深呼吸をして言う。
「あのね、聞いてほしい話があるんだ。」
＃＃＃＃＃＃
２ヶ月後、
病院の入口で、紺野木綿季（こんのゆうき）はお世話になった医師に頭を下げる。
「先生、長い間本当にお世話になりました。」
「いいんだよ、木綿希君。
私も君を助けられてよかった。

と言ってもこれからも検査で通院してもらうけどね。」
「先生、残ったみんなの事、よろしくお願いします。」
「ああ、私も医師として最善を尽くすさ。
でも本当にいいのかい？他の友達に連絡しなくて。」
医師の言葉に木綿希は首を振り、悲しげな笑顔で言う。
「みんなとの思い出はすごく大事だけど、
だからこそ迷惑かけたくないんだ。
だから・・・これでいいんだ。」
「そうかい・・・だそうだよ、飾くん。」
「・・・え？」
木綿希が振り向くと、一人の少女がたっていた。
黒髪のショートヘアーに、端正な顔立ちの少女は笑顔で木綿希に言う。
「初めまして、紺野木綿季さん。
御城飾です。」
その少女と木綿希は初対面のはずだった。
だが少女が身に纏う雰囲気は木綿希の馴染み深いものだった。
「まさか・・・カチューシャ・・・？

そんな・・・どうしてここに・・・？」
「都内でメディキュボイドの臨床試験をしてるのはここしかないからね。
特定は余裕だった。」
「でも・・・ボク・・・僕は！」
木綿希の側まで歩み寄ると、飾は木綿希の目を真っ直ぐに見て言った
「諦めるな、ユウキ。
私は何があっても絶対に君を諦めない。
だから、君も私を・・・私達を諦めるな。」
「・・・！」
「もう一度聞く、君は本当にそれでいいの？
本当はどうしたい？」
「ボク・・・ボクは・・・。」
木綿希の目から涙が溢れ出す。
「僕はみんなと一緒に居たい！
これからもみんなと遊びたい！」
「うん、わかった。」
飾は木綿希の手をとると、

「じゃあ行こう。」
そう言って歩き出した。
飾は木綿希を連れて、駐輪場までやってきた。
そこに置いてあった1台のバイクに近づくと、
ヘルメットケースから2つヘルメットを取り出し、1つを木綿希に渡す。
「乗って。」
促されるままヘルメットを被り、バイクの後部座席に座る。
飾もヘルメットを被り、運転席に乗った。
「それじゃあ、ちゃんと捕まっててね。」
言葉通りに木綿希が飾の腰にしがみつくと、
バイクは走り出した。
＃＃＃＃＃
しばらくすると、飾と木綿希を乗せたバイクは、1件の家の前に着いた。
「ここって・・・。」
「うん、私の家。」
飾は木綿希を連れて玄関の扉を開く。
「ただいま。」

飾が帰りの挨拶を言うと、家の奥から一人の女性が歩いてきた。
「おかえり、飾。
その子が？」
女性は黒髪ポニーテールの美人で、
身に纏う雰囲気は飾によく似ていた。
優しい笑顔に、木綿希の気も微かに和らいだ。
「うん、友達の木綿希。」
「は・・・はじめまして！紺野木綿季です！」
「はじめまして、飾の母の恋乃葉（このは）です。」
飾りたちが木葉と喋っていると。
奥から男性が歩いてきた。
「おう飾、帰ったか。」
黒髪のショートヘアーに、端正な顔立ちの男性は、細身だがよく鍛えられた体をしていた。
「もう、総（そう）ちゃん。
帰ったかじゃなくてお帰りでしょ。」
「別にいいだろうが恋乃葉。

どっちも大して変わらねぇよ。」
男は歩み寄ると、木綿希の頭をワシワシと撫でる。
「よく来たな、木綿希。
御城総輔(そうすけ)だ、よろしくな。」
男は少しの間木綿希を撫でると、
飾と木綿希に言う。
「とりあえず入れ、話は中でしよう。」
木綿希は居間に通され、テーブルの前に置かれている座布団に座る。
木綿希の隣に飾が座り、対面に総輔が座る。
やがてお茶を運んできた恋乃葉が、総輔の隣に座ると、少しの間を置いて総輔が口を開く。
「単刀直入に言おう、
木綿希、うちの娘になれ。」
その言葉に、木綿希は一瞬ポカンとして聞く。
「娘って・・・ボクを引き取るってことですか?」
「そうだ。
お前の事情は聞いたし、親族にも会ってきた。

そして確信した、あそこに居てもお前に未来はない。
「でも・・・あっちが納得するわけがないよ。」
「安心しろ、そのへんの話は済んでる。」
「え!?どうやって!?」
「決まってんだろ。」
総輔何故かドヤ顔を決める。
「金だよ。」
「・・・え?」
木綿気がポカンとしていると、飾と恋乃葉はため息を吐く。
「父さん、ドヤ顔決めてるとこ悪いけど全然かっこよくないよ?」
「堂々と金で解決したって言われてもねぇ。」
「なんで俺が悪者みたいになってんだよ!
お前らだって見てたろ!?
俺だって粘ったんだよ!
でも連中が金ださねぇと納得しねぇって言い出したんだから仕方ねぇだろ!」
総輔は声を荒らげて2人に反論したあと、
咳払いをして再び木綿希に向き合う。

「というわけで、そのへんは心配すんな
それにウチはそれなりに稼いでるからな。
娘の1人や2人どうってことねぇよ。」
「・・・でも・・・僕は・・・。」
総輔の言葉に木綿希は、俯いて言う。
「僕は・・・今までいろんな人にお世話になってきた。
だから・・・これ以上迷惑はかけたくないんだ。」
そう言った木綿希を、
「生意気言うな小娘。」
総輔は鋭い声で叱責する。
「他人に迷惑をかけたくねぇだァ？
それで自分が後悔してりゃあせわねぇだろうが。」
「・・・！」
総輔と言葉に、木綿希の肩が震える。
「いいか？よく聞け木綿希。
人間はなぁ、多かれ少なかれ他人に迷惑かけながら成長するもんなんだ。
お前がどれだけ仮想世界で強いかは知らねぇ。

でもな、これからのお前の世界は仮想世界だけじゃない。
殴られたらいてぇ、怪我すりゃ血が出て下手すりゃ死ぬ。
それが現実世界（リアル）だ。
そんなクソッタレな世界で、
てめぇみてぇなヒョロい小娘が他人様に迷惑かけずに生きていけるわけねぇだろ。
１０年早いわ。」
「でも・・・僕・・・」
「・・・ユウキ。」
飾はユウキの手を優しく握る。
「私も皆も、知ってるよ。
ユウキが今までどれだけ頑張ってきたか、
ちゃんと知ってる。」
「・・・カチューシャ。」
飾は木綿希に優しく微笑む。
「だからさ、そこし休もう。
これからは、私も一緒にいるから。」
「カチューシャ・・・うっ・・・ひぐっ・・・」

飾の言葉に、木綿希は静かに涙を流した。
＃＃＃＃＃
木綿希が泣き止むと、飾は木綿希を2階の自室に連れていった。
部屋には同じようなベッドがふたつ置かれていた。
どちらも近くにパソコンが置かれており、アミュスフィアと繋がっていた。
片方はいつも飾が使っている方、
そしてもう片方は・・・。
「もしかして・・・これ・・・。」
「うん、ユウキのだよ。
ＧＧＯで手に入れたお金、結構溜まってたから買っちゃった。」
「い・・・いいの？」
「遠慮しないでいいよ。
・・・みんなと遊びたいんでしょ？」
「・・・うん。」
木綿希が頷くと、飾はニッコリと微笑む。
「さて、それじゃあ早速みんなに会いに行こうか。
ユウキのこと、みんな心配してるよ。」

「・・・うん！僕もみんなに会いたい。」
２人はベッドに横になり、ＧＧＯを起動してアミュスフィアを装着する。
「「リンクスタート！」」
２人の声が重なり合った。
＃＃＃＃＃＃
ＳＢＣグロッケン、スコードロンのホーム。
「皆！心配かけてごめん！」
頭を下げるユウキに、キリトとアスナは笑顔で言う。
「頭を上げてくれ、ユウキ。」
「そうよ。
たしかに心配したけどこうやってまた会えたんだから、ね。」
「・・・うん。」
そんな会話の後、クラインは苦笑いで言う。
「それにしても、カチューシャがリアルでユウキを引き取るって聞いた時は面食らったぜ。」
「私は後見人になってくれないかって頼んだんだけど、
話を聞いた父さんが『それなら手っ取り早く引き取っちまうか。』って言ってさ。

溜まってた有給を使って来てくれたんだ。」
「あはは。
相変わらずね、おじさん。」
話を聞いたクレハが楽しそうに笑う。
ユウキが姿勢を正してもう一度仲間たちに向き直る。
「えっと・・・これからも色々と迷惑をかけるかもだけど・・・よろしくね、みんな！」
部屋の中を暖かい拍手の音が響き渡った。
＃＃＃＃＃
都内、墓地。
綺麗に磨かれた墓の前で、
喪服に身を包んだ総輔、恋乃葉、飾、木綿希の４人は墓石の前で手を合わせる。
墓の中で眠っている家族に、木綿希は手を合わせながら語りかける。
「お父さん、お母さん、姉ちゃん。
ごめんね。
寂しい思いをさせちゃうけど、僕、この世界で生きていくよ。
だから待ってて・・・いつか、逢いに行くから。」
そのユウキのそばで手を合わせて、総輔は語りかける。

「おたくの娘さんは、俺達が責任をもって育てる。
だから、見守っててやってくれ。」
４人は墓石に長い間、手を合わせていた。
＃＃＃＃＃
１ヶ月後。
飾は二人分の朝食を用意していた。
すると、２階から騒がしい音を立てながら木綿希が降りてきた。
「姉ちゃん！コハク！おはよう！」
「おはよう、木綿希。」
「おはようございます！ユウキ！」
飾と、ＰＣのモニターの中にいるコハクが木綿希に朝の挨拶を返す。
「姉ちゃん姉ちゃん！制服！おかしな所ない!?」
高校の制服に身を包んだ木綿希にカチューシャは笑顔で言う。
「うん、大丈夫。
すごく似合ってるよ、木綿希。」
「ホントに!?」
「ホントホント。

かわいいよ、木綿希。」
「えへへ／／／／」
照れるユウキの頭を撫でながら飾は微笑む。
「今日から1年生だね、木綿希。」
「・・・うん、皆よりだいぶ遅れたけど。」
「気にしない気にしない、
今日のために少しづつだけど運動して体力もついてきたし。
頑張って勉強して、編入試験も合格した。
・・・それに。」
カチューシャは優しく微笑む。
「同じ学校なんだし、もしもの時は私に頼ってくれていいから。」
「うん、ありがとう姉ちゃん。」
「それに今日は私が1日そばに居るのですよ！ユウキ！」
「うん、コハクもありがとう。」
ユウキは自分のスマホの中に入ってきたコハクに礼を言うと、朝食をとった。
その後カバンをもって玄関で靴を履く。
「準備出来た？木綿希。」

「うん。」
「よし、それじゃあ行こうか！」
木綿希は飾と手を取り合って、玄関を出た。
かくして眠れる騎士は目覚め、走り出す。
新たな冒険の旅へと。